

日中韓国における漢語の意味と発音の変化

—総角・愛人・知音の伝播と変容—

丹羽 博之

要旨

漢語が中国から東アジアの国々に伝わり、それぞれの国の文化に寄与したことは贅言を要しまい。本稿では、総角・愛人・知音の三つの漢語が朝鮮半島や日本に伝わり、如何に変化したかを考察する。

総角の語は、中国最古の詩集『詩経』（衛風・氓）に「総角之宴、言笑晏晏」と見える。『大漢和辞典』では、この漢語に、「あげまき、髪をすべ聚めて頭の両側に角の形にむすぶ小児の髪型。（略）」と注する。この語は早くも上代、日本に入り、『時代別国語大辞典 上代篇』には、「あげまき」「総角」少年の髪型の一種。」とある。このほか、古典世界では、催馬楽（総角）、『源氏物語』（総角）にも見られる。

一方、この語は韓国にも伝わり、現在でも使われている。「総角（총각）」の語は『韓日・日韓辞典』（小学館）には、「未婚の男、チョンガー、独身男性」とある。チョンガーは日本にも伝わり、今も使用されている。

中国から伝わった総角の語は日韓でそれぞれに変化した。現在、総角の語は元の中国では殆ど使われず、日本でもわかる人は減少している。チョンガー（総角）は、韓国においてだけ現在も使われ続けている。

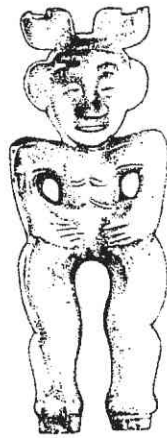
ほぼ同様のことが愛人の語にもあてはまる。元は「人を愛す」という普遍的な語であったり、英語の *lovers* の翻訳語であったが、韓国語では愛人は、恋人の意味で使われる。日本の所謂愛人は戦後「情夫、情婦」の意味も加わり、変化した。中国でも、恋人の意味から配偶者の意味に変化した。

また、知音の語も現在中国では、本来の意味で使われているが、日本韓国では恋愛関係にも使われている。この三例を取り上げ、漢語は本国でも、日韓でも時代とともに様々に変化していったことを考察する。

キーワード…総角・愛人・知音・呉音

一 総角

総角の語は、中国最古の詩集『詩経』(衛風・氓)に「総角之宴、言笑晏晏」と見える。『漢語大詞典』には、



总 角

【總角】 ❶古时儿童束发为两结，向上分开，形状如角，故称总角。《诗·齐风·甫田》：“婉兮孌兮，總角卅兮。”郑玄笺：“總角，聚兩髦也。”孔颖达疏：“總角聚兩髦，言總聚其髦以爲兩角也。”《陈书·韩子高传》：“子高年十六，爲總角，容貌美麗，狀似婦人。”宋苏轼《被酒独行》诗之二：“總角黎家三小童，口吹葱葉送迎翁。”《红楼梦》第三回：“這院門上也有四五個才總角的小廝，都垂手侍立。”王闿运《皇中宪大夫侯官陈君墓志铭》：“君孝思純穆，神情淵靜，總角之年，研精六藝。”❷借指童年。晋陶潜《荣木》诗序：“總角聞道，白首無成。”南朝宋刘义庆《世说新语·识鉴》：“夷甫時總角，姿才秀異。”唐（安阳殷墟妇好墓玉器）刘知幾《史通·自叙》：“故始在總角，讀班謝兩《漢》，便怪前書不應有古今人表，後書宜爲更始立紀。”清刘大櫟《祭族长嗣宗先生文》：“我始總角，翁猶壯年。”

【總角交】 童年相交的好友。清沈复《浮生六记·

とある。
『大漢和辭典』では、この漢語に、

「あげまき、髪をすべ聚めて頭の両側に角の形にむすぶ小児の髪型。(略)」

と注する。この語は早くも上代、日本に入った。『時代別国語大辞典 上代篇』には、

あげまき「総角」(名) 上ゲル巻きの意。①少年の髪型の一つ。頭髪を左右二つに束ねる。「総角」「角子」などと「角」の字を用いるのは、中国でその束ねた位置が高く、動物のつのような形になるところから出たものという。「古俗、年少児年、十五六間、分為角子今亦為之」(崇峻前紀)「髻角叩束髪、阿介万支」(新撰字鏡)「総角弁色立成云、阿介万岐、結髪也」(和名抄)②髪をアゲマキに結った年ごろ。またそれを結った少年。「我子小碓王、昔熊襲叛之日、未_レ及_二総角_一、久煩_二征伐_一」(景行紀四十年)「天皇自_二岐嶷_一至_二於総角_一、仁惠儉下」(允恭前紀)「安介万支を早稲田に遣りてやそを思ふと」(神樂総角)「安介万支やとうとう尋ばかりやとうとう離りて寝たれども転びあひけり」(催馬樂総角)とある。

このほか、古典世界では、催馬樂(総角)、『源氏物語』(総角)にも見られる。『古語大辞典』(角川書店)は、「昔の少年の髪形の。髪を束ねずに頭の中央で両側に分け、頭の左右に巻き上げて輪を作ったもの。」として、〈伝聖徳太子像〉を挙げる。



総角曰① 〈伝聖徳太子像〉

一方、この総角の語は韓国にも伝わり、チョンガー(총각)として現在でも使われている。「総角」の語は『韓日・日韓辞典』(小学館)には、「未婚の男、チョンガー、独身男性」とある。チョンガーは日本にも伝わり、今も使用されている。『日本国語大辞典』(二版)の「チョンガー」には、

「〔総角〕の朝鮮漢字音」独身男子の俗称。」とあり、補注には、「元来未成年男子の髪型の名称であるが、朝鮮の旧習で丁年に達しても未婚でいる男性の蔑称として用いられ」とある。恐らく、チョンガーの語は植民地時代に日本に伝わり、定着したのであろう。韓国独立後日韓の関係の変化につれて日本では年配の人以外は使わなくなった。

児童の髪型から幼少の意味として、中国から伝わった総角の語は日韓でそれぞれに変化した。現在、総角の語は元の中国では殆ど使われず、日本でもわかる人は減少している。チョンガー(総角)は、韓国においてだけ現在も使われているが、元の漢語は意識されていないだろう。

二 愛人

ほぼ同様のことが愛人の語にもあてはまる。愛人は「人を愛す」という普遍的な語あったが、韓国語では愛人は、恋人の意味で使われる。日本の所謂愛人は「情夫、情婦」という(『日韓熟語対照辞典』申東漢 時事日本語社 一九九一年)。

一方、中国では、愛人は配偶者の意味に変化した。日本では、明治時代までは「敬天愛人」の意味であったが、戦後、不倫関係の意味が生じてきた。

このように、漢語は本国でも、日韓でも時代とともに様々に変化していった。『明治ことば辞典』(飛田良文他編・東京堂一九八六)の愛人の項には、

〔英和对訳袖珍辞書・文久二〕honey・sweetheart

〔独和辞典・明六〕Mädchen.

(以下略)

▽意味 「愛人」は礼記・檀弓上に「君子之愛_レ人也以德、細人之愛_レ人以_二姑息_一」とあるように「人を愛する」という意味であったが、幕末からsweet-heart, honey, loverなどの訳語として「恋人」の意味でも使われるようになった。(以下略)

とある。また、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』（佐藤了・明治書店）の愛人の項には、

① [Sweet heart's 愛人]（堀達之助ら・文久二（一八六二）『英和对訳袖珍辞書』）

② 「世人或ハ愛人ノ美名ヲ買ハントシテ慢ニ政府ノ任ヲ責メ」福沢諭吉・慶応三年（一八六七）『西洋事情』外・二 政府の職分

③ 「仁徳天皇民家に炊煙の起るを見て朕既に富めりと云ひしも、必竟愛人の本心より出て、民の富むは猶我富む如しとの趣意にて、」（福沢諭吉・明治八年（一八五七）『文明論之概略』五・九）

④ 「此の神女の眠りはいと安し 余は幾度も軽るく足を踏み、愛人の眠りを攪さんとせし、左れど眠りの中に憂のなきものを、」（北村透谷・明治二十二年（一八八九）『楚囚之詩』）

意味・出自①④恋愛をする相手の人。こいびと。②③人をいつくしみ大切に思うこと。『礼記』（檀弓上）に「君子之愛人也以德、細人之愛人以姑息」とあるのは②③と同じ意で、これが本来の意味。これを限定して用いたのが①④の例とある。

『日本国語大辞典』（二版）の語誌には、

（１） もともとは①の意味であったが（引用者注…①人を愛すること）、「英和对訳袖珍辞書」などに見みられるように、江戸時代末頃から honey, lover, sweet-heartなどの翻訳語として②の意味（引用者注…②愛しているという異性。恋人。特に夫や妻以外の愛している異性）でも使われるようになった。

（２） 第二次世界大戦後、新聞などで「情婦」「情夫」の婉曲的表現として用いられるようになってから一般化する。現代では、配偶者以外の、社会的に容認されにくい関係にある相手についていうことが多く、「恋人」とは区別して用いるとある。

二〇一〇年にNHKで放映された「みんなで日本GO」によると、明治期に来日した中国・韓国の留学生によって、如上の翻訳語としての愛人が母国に持ち帰られて使用された。韓国ではそのままの意味で使用されたが、中国では戦後、配偶者として意味が変化したというところである。

「恋人」との棲み分けによって、「愛人」は不倫を示す意味の度合いが強まったようである。更には、テレサテンの歌謡曲「愛人」や愛人バンク等の流行が愛人の意味を悪い方に導いたものと考えられる。

二〇一〇年八月、湖北省の高速道路のサービスエリアで買い求めた『愛人』という雑誌。出版案内には、

発行・愛人雑誌発行部

主管・中国優生優育協会

とあった。内容は、野合を戒めるための健全な結婚生活の指南書。今でも愛人は普遍的に中国では使われている一証左である。『辞海』（台

湾中華書局 中華民國六十九年）に

③ 今俗謂相戀之男女雙方曰愛人 今俗に相戀の男女の雙方を謂ひて曰はく愛人と

とあり、台湾では韓国と同じ意味で使われている。

現在、韓国語では愛を「애」と発音し、上海でも愛は「え」に近い発音をするということを知り、日本語の愛を「え」と読むことと関係があることに気づいた。日本でも、愛媛県や滋賀県愛知川^{えち2}など日本の地名には、愛を「え」と読むことがある。以下この問題について考察する。

『時代別国語大辞典上代篇』には、「愛」を「え」と訓む例として、

「鮎こそは島へも良き愛^え苦し系」（天智紀・十年）

を挙げる。同辞典の「付録・主要万葉仮名一覧表」の「え」の項には、

衣・愛・依・亜・哀・埃・榎・荏・得・可愛

等が挙げられている。これらの中で、愛・哀・埃の語は、韓国語では、現在「애」と発音されており（『活用玉篇』現代中国學術研究所編 泰西出版社 二〇〇五）、上代の日本語に近い発音であったと推定される。

また、上海語でも愛・哀・埃の語は、『上海語常用同音字典』（宮田一郎編著 光生館 一九八八）に

				ㄹE	
				歟	晏
				𪛗	
				唉	
				埃	
				暖	
				哎	
				暖	
				哀	
				爱	
ㄹE ⁵³					
ㄹE ³⁴					

とあり、ほぼ日本語の「え」の発音に相当する⁽¹⁾。

中国鄭州大学での早稲田大学日本宗教文化研究所との共催の国際シンポジウム「漢字文化遡源—文字から書籍へ—」(二〇一〇年九月十二日)で、この発表を行った。シンポジウム終了後、浙江省出身の先生にお聞きすると、浙江省では今でも「愛人」は「えにん」と発音するということである。「愛」を「え」と発音することは勿論、「人」も「にん」「人」の呉音は「にん」と発音しており、千数百年経過しても、呉音の発音がそのまま残っていることに感動を覚えた。今回の国際シンポジウムに参加して得た最大の収穫である。さらに聞くと、上代語で「え」と読む「哀」「埃」の浙江省での現在の発音は、やはり「え」ということで、これまた上代日本語と一致する。

千数百年前、浙江地方での「愛・哀・埃」の音は、朝鮮半島に伝わり、今も「애」と発音されている。上代日本でも「え」の字として使われた。その後、漢音に取って代われ「愛・哀・埃」は「あい」と発音され、「え」の音は消えていった。上代日本語の「愛・哀・埃」を「え」の文字として使われていること、現代韓国や、現代の上海や浙江省でも「愛・哀・埃」を「え」に近い発音をしていることから、千数百年前の呉地方でもこれらの字は「え」に近い発音であったことが考えられる。これらのことから、「愛・哀・埃」の字の音に呉音として「え」を加えるべきではないか。上代語・漢和辞典作成の専門家からみれば、荒唐無稽な発言かもしれないが、三国の発音の類似からそ

の可能性を提言したい。手元にある漢和辞典には、愛を呉音「え」と明示したものは未見であり、

『広漢和辞典』アイ（呉音と漢音は同じ）

『新字源』 アイ 漢

『角川必携漢和辞典』『角川大辞源』アイ 漢 呉 エ 慣

等と説明にもずれがある。また、「哀・埃」を呉音「え」と説明する辞書も未見である。

因みに、エジプトを日中韓ともに「埃及」と漢字で表記するが、恐らく、中国南方の発音の埃を「え」と発音したことにより、エジプトを「埃及」（現代中国語では，埃及⁽³⁾と表記したのであろう。それが、日本韓国に伝わり、埃及の表記が定着したと考えられる。

三 知音

伯牙・鍾子期の知音の故事は有名なものと思っていたが、最近の大人も知らない人が多く、やや意外の感がしたので、『広辞苑』（第六版）の解説を挙げる。

①「列子 湯問」（鍾子期しようしきが、琴の名手伯牙の琴の音色をよく聞き分けた故事から）よく心を知り合っている人。親友↓高山流水・弾琴の交わり。②知り合い。知人

このように、知音は真の才能の理解者を示す格調高き故事であった。ところが、『広辞苑』には、

③恋人。情人。一代男三「しほらしき女は大方知音ありて」【知音女房】なじんだ女房。恋女房。膝栗毛八「ソリヤわしが知音女房 ちゃわいな」

と、江戸時代には意味が変化したことが説明されていた。更に『江戸時代語辞典』（荏原退蔵著・尾形侑編 角川学芸出版 二〇〇八）には、

もと伯牙、鍾子期の故事から出て、親しく交わること、またその友をいうが、転じて特に恋情をもって交わること、またその人をいう。

馴染み。情交。男色・女色・素人・玄人の区別なく用いる。『野語述説』（貞享元）雑篇に「古俗故旧名曰知音。今男女密通之語、然共取義於同氣同心之睦、蓋出于此乎」とあり、また、『色道大鏡』（延宝六）一ノ一にも「知音 客の傾城に思ひ付て逢事度かさなり、忒心なく相かたらふをいふ。平生の人の上にて知音といふも心ひとし。此名目は子期・伯牙が古事より出たり。これによって音をしる」と書く

とあり、江戸時代には、現代と異なり、知音は種々の意味を持って広く人々に使われていた。明治以降こうした江戸文学の衰退とともに知音の語は元の意味だけが残ったようである。

更に、『朝鮮語大辞典』（大阪外国語大学朝鮮語研究室・角川書店）の「知音」の項目には

①音楽の曲調を知っていること。③心が互に通じる親しい友、親友④知人等の次に

⑤恋人、情人

とある。韓国でも知音は、江戸時代の日本と同じく恋愛関係をも指すように意味が広がっている。中国では元の意味のまま使い続けられたが、日本と韓国では色恋の意味を持つようになった。日韓の知音の意味変化の影響関係は今後の課題としたい。

愛人・知音の語はもとほ格調高い漢語であったが、日本・韓国では、情人の意味にも使われ、日韓では内容が変化していった。

まとめ

総角は元の中国では殆ど使われないが、韓国では意味を変えて未婚の独身男性の意味となり、植民地時代にそれが伝わった日本でも使われている。一方、愛人・知音の語は、日中韓台でそれぞれに意味が異なって使われている。また、愛を「え」と読むことは、古代中国の呉地方の発音と関係があると考えられる。

注

- （1） 近畿大学非常勤講師永井英美氏ご教示。
- （2） 滋賀県愛知川町は、上代には依智秦氏が勢力を持ち、朝鮮半島の文化の影響を強く受けてきた。現在も百濟寺が残り、湖東三名刹の一である。
- （3） 大手前大学教授上垣外憲一氏ご教示。

*本稿は、早稲田大学日本宗教文化研究所主催「襄陽と荊州」湖北省調査旅行・セミナー（二〇一〇年八月四日）でのセミナー、及び中国鄭州大学での、同大学・浙江工商大学日本文化研究所・早稲田大学日本宗教文化研究所共催の国際シンポジウム「漢字文化遡源―文字から書籍へ―」（二〇一〇年九月十二日）での発表に基づくものである。

席上多くの助言を得た。記して御礼申し上げます。

補足

原稿提出後、『新潮日本語漢字辞典』（新潮社編 二〇〇七）を購入した。同書には、愛・哀・埃のいずれの字にも

アイ漢呉・エ呉

とあり、愛・哀・埃の字に呉音として「え」を認定していることを知った。拙稿でも考察したように、これらの字の呉音「え」を認めるべきであろう。

出版社に問い合わせたところ、字音部分の執筆者はすでに逝去されており、詳しい事情は不明とのことであった。

同辞典の凡例の字音の項には「漢音、呉音の認定にあたっては『広韻』を最重要視した。」とある。但し、『広韻』の愛の音（反切）は「アイ」となっている。